

# アメリカ合衆国における日本語学習教材について

牧野成一 (プリンストン大学)  
MAKINO Seiichi

私に与えられたテーマはなかなか難しいテーマで、20分で、アメリカの日本語学習教材を分析し、提言をするということです。私はアメリカで日本語教育に携わっていますから、当然アメリカの日本語学習教材が分析の対象になりますし、一貫して大学レベルでの日本語教育をしてきましたから、大学以前のレベルについての私の知識は聞きかじり、読みかじりの域を出ていません。まず始めに、現在主として使われている教材について、それから、ニーズに対応する教材のあり方と教材の開発の方法について合わせて、お話ししたいと思います。

## (A)現在主として使われている教材

教材と言いましても、4つの角度から検討しなければなりません。第1に、レベルが所謂、初級、中級、上級なのか、第2に教育の場が大学以前なのか、大学なのか、第3に、教材がどの技能を目標にしているのか、つまり、話技能、聴技能、読技能、書技能なのか。あるいは多技能、つまり、総合的技能なのか。第4にコンピューターが関係しているのか、いないのか、ということです。最後のコンピューターによる教材はかなり開発されつつありますが、機器のコスト高などで、ほとんどが開発した機関だけで単独に使用されています。パーデュー大学の畑佐一味助教授の開発した仮名学習ソフトやMITのグラハム智子、和佐敦子講師とかピッツバーグ大学の奈良博助教授のように、読技能のための独自のソフトを開発しているところはかなりあるようですが、教科書のように広く使われているものはないようです。

そこで、三つの軸で分類して、その主な教材を表にしてみますと、表1のようになります。大学以前の機関では上級まで行く機関は少ないので、中級どまりとしました。以下の表は Jordan with Lambert (1991) と1991年の11月にプリンストン大学で行われた Symposium on Intermediate and Advanced Japanese Language Instruction の Course Survey を参考にして、私の考えを加えながら、作成したものです。表の番号は教材、文献リストの番号に対応します。ゼロはかなりの機関で使われている主な教材がないということです。番号に\*が1つつけてあるものは統計はないが、おそらく Jordan with Lambert 以後使用が増えていると推測されるもので、2つつけてあるものは、広く採用されていないが、注目すべきもので、#がつけてあるものは Jordan with Lambert で対象になっていないけれども、よく使われていると思われる教材です。

「教材」という日本語も teaching materials という英語もよく考えてみると、一時代前の、教師中心のアプローチを示すような言葉です。「学習材料」(学材?) と呼びたいぐらいです。それはともかくとして、「教材」は学習者が中心に使うものと、教師が中心に使うものがあります。今お話しした表でもっぱら学習者が使う教材を対象にしていますが、私達日本語教師が教室に行く前の準備段階で使う教材とか、学習者が教科書以外に使う辞書とか参考書に関しては、その

表1 よく使われている教科書 (表の数字は教材リストの番号に対応する。)

(1) 大学以前の機関

レベル	初級	中級
技能		
話技能	ゼロ	ゼロ
聴技能	ゼロ	ゼロ
読技能	ゼロ	**2
書技能	ゼロ	ゼロ
<多技能>		
4技能	1,14,15,20,26	1,14,15,20,26
2技能	#10	#10

(1) 大学機関

レベル	初級	中級	上級
技能			
話技能	ゼロ	ゼロ	ゼロ
聴技能	ゼロ	ゼロ	ゼロ
読技能	12	3,12	9,12
書技能	ゼロ	ゼロ	ゼロ
<多技能>			
4技能	16,*22,*23,26	4,16,*17,*22,*25,26	ゼロ
3技能(読、書、話)	ゼロ	*25	ゼロ
2技能(聴、話)	1,#10,#11,#18,*21	1,#10,#11,#18,*21	1,#5,**7,#10,#11,**24
(読、書)	13	13	#8

使用状況調査は、私の知るかぎりではありません。私の日本語教授法の授業では、さまざまな辞書(例えば、森田良行の「基礎日本語」、教授法の一般的な本(例えば、Alice Omaggio HadleyのTeaching Language in Context, Heinle & Heinle, (2nd ed.), 1993)、文法の参考書(例えば、我田引水のきらいはありますが、Makino, S. & Tsutsui, M.のA Dictionary of Basic Japanese Grammar)などを使っています。この種の参考書の統計はJordan with Lambert (1991)にもないので、どなたかに出していただくと大変参考になると思います。

教材について、もう1つ言及しなければならないことは、Jordan with Lambert (1991:41:T2.29, 109:T3.62)の表にもあるように、私達教師は教科書がどんなに完備していても、なおかつ自分たちの手で補助教材あるいは新聞、雑誌記事、小説、論文、詩、テレビ(ニュース、ドラマ、座談会)などの生教材に基づく主教材を作っているという事実です。しかし、特に、補助教材の場合これはJordan with Lambert (1991:42)が指摘しているように、情報交換なしにやっていく場合が多いため、重複が出て、お金と時間のムダにもなっています。たしかに、各機関の特殊なニーズに合った補助教材、主教材を開発したいという教師の欲求と努力は同僚として理解出来るのですが、家内産業的に、およそ役に立たないような教材を開発してしまう危険がともなうと思います。ビデオ教材は国際交流基金で開発されたもの(#10, 11)がよく使われていますが、中、上級用は各機関で開発しているようです。最近のめぼしいものとしてはブラウン大学、電気通信大学、国立国語研究所の共同開発した「となりのトトロ」のハイパーメディア教材があります。MITの宮川繁教授の指導のもとで開発された「七夕」という日本語と文化を合体したインターアクティヴ教材も特筆に価するでしょう。一般にはコンピューターによる教材開発も、家内産業的な性格がまだあり、宮川繁教授を中心に世界的な規模のネットワークづくりの計

画がようやく出来たところです。

教材として、まだ触れていなかったものに、Japanese for Special Purpose すなわち、特別の教育目的をもった日本語教育のための教材があります。ご存知のように、ビジネス日本語と科学技術日本語がその代表的なものです。Jordan with Lambert (1991: 75) によると、全米の登録者数は、ビジネス日本語が、17校243名、科学技術日本語が、6校72名と、微々たるものです。ビジネス日本語の教材はニッサン自動車会社が作成した Business Japanese — a guide to improved communication (1984) が主に使われているようです。Jordan with Lambert (1991) 以後、科学技術日本語は関心が強まってきているという印象を私は持っています。科学技術日本語の教育を1980年に導入したウイスコンシン大学では、Edward Daub 教授の後を継ぎ、Jim Davis 教授が指導にあたっており、ピッツバーグ大学の David Mills 教授は1987年から毎夏 MIT で夏期講座を行っていますし、シアトルのワシントン大学の工学部では筒井通雄教授が科学日本語の教育及びソフトの開発を行っています。主な教材は Daub, E., Bird, R. & Inoue N. が編集した Comprehending Technical Japanese, University of Wisconsin Press/ University of Tokyo Press (1975) と Basic Technical Japanese, University of Wisconsin Press, (1990) です。

(B)新しいニーズに対応するには、どのような教材が必要か、その作成はいかにすべきか。

私 (Makino (英文1988/日本語1989)) は80年代の後半に国際交流基金の依頼で80年代のアメリカにおける日本語教育の展望を書いたことがあります。その中で80年代に日本語を学習し始めた学生の動機は、60年代、70年代のそれに比べて、より実学的で、学問的志向が後退しているということを指摘しました。横浜の Inter-University Center for Japanese Language Studies という北米のエリートの学生が日本語を1年間集中して学ぶ機関がありますが、この結論はその卒業生の就職先の変化を辿ってみて出したものです。1961年から79年では、学生の49%が大学教師になり、17%がビジネス関係に就職していますが、1980年から86年では、この比率が、大学教師14%、ビジネス関係が50%と逆転していたのです。ただし、日本学者になろうとする絶対数は減少していませんでした。80年代は、日本語学習と博士論文の研究で来ている学生が、その日本語力を買われビジネス界に入り込むケースが多かったようです。Jordan with Lambert (1991: 63 Table 2.52, 122: Table 3.85) はおそらく89年、90年ごろの学習者の動機を反映していると思われませんが、日本語学習理由として、大学以前の学習者は「就職に有利 (15.6%)」(job opportunities) をトップの理由にあげており、大学生は、「仕事と関係のある日本語が出来るようになる (4.2%)」(To be able to Use Job Related Japanese) と「就職に有利になる (9.3%)」(To improve Job/ Career Opportunities) をあわせると、やはり、トップの理由になります。ただ、現在の日本語登録者数はほとんどの大学機関では横這いか、やや減少気味で、もし日本の経済の不況が長引けば、おそらく、経済的な動機はますます低下するのではないのでしょうか。それから、伝統的に日本学者を輩出している代表的な大学では、学問的な動機が向上するのではないかと推測されます。興味深いことは大学以前の機関は就職戦線から遠のいているからか、その登録者数は依然として上昇気味の様です。

現時点で、大方の学習者のニーズが経済的であるという解釈が正しいとすると、教材はそれに

どう対応すべきでしょうか。私の考えでは、初級、中級の日本語の場合は、学習者のニーズにかかわらず、話す技能と聴く技能に重点をおきながら、4技能アプローチを使って基本的なコミュニケーション、つまりサバイバルの日本語が身に付くような教材でなければならないと思います。今焦点を初級教科書にかざりますと、80年代後半から90年代にかけてアメリカで出版された代表的な初級教科書（実際には二年度にも使われるので、初級、中級兼用の教科書ですが）として、Jordan with Noda の *Japanese: the Spoken Language* 1987-90と Tohsaku の *Yookoso!* 1993 があげられます。実は私も畑佐一味、由紀子と共著の初級教科書を書いているところですが、その視点をまぜながら、90年代にどんな初級の教科書が必要かを考えて見たいと思います。

*A Framework for Introductory Japanese Language Curricula in American High Schools and Colleges* (1993以下で *Framework* と呼びます) という National Foreign Language Center の要請でメリーランド大学の Marshall Unger 教授が多数の日本語教育者と協議して作成した初級日本語教育の指導要領のようなものがあります。これは21世紀にかけてアメリカの日本語教育カリキュラムを考える上で、一つの大事な指針となるものです。この *Framework* (38-42) には、いい教科書の最大公約数的な特徴が列挙されています。今それを見ていきますと、全体の構成と内容について次のようなチェックリストを提案しています。その中の一番一般的な部分だけを紹介しますと：

#### 教材評価の基準

- (a) 話題、内容が文化的に本物か。
- (b) 日本語が本物か。
- (c) 文法などが積み重ね方式で提出されているか。
- (d) スパイラル方式をとって、言語内容が復習しやすくなるように配慮されているか。
- (e) 普通の素材に力点がおかれているか。
- (f) 文法などの導入は易しいものから難しいものへと進んでいるか。
- (g) 場面は具体から抽象へと進むように配慮されているか。
- (h) 英語を母語とするアメリカ人の学習者が日本人と話すような内容になっているか。
- (i) 文法とか、社会言語学的内容はアメリカ人の自国の文化、言語知識を直接踏まえてできているか。
- (j) アメリカ人学習者の日本に関する知識の欠如や日本で彼らが遭遇するような場面に関して配慮されているか。
- (k) 内容は大学以前の学習者にふさわしく出来ているか。大学の初級学習者にふさわしく出来ているか。
- (l) 説明は初歩の学習者用になっているか。
- (m) 始めから日本語の文字を習わなくてもいいように、話しことばをマスターするための表記法があるか。
- (n) 初歩の学習者に文法構造の重要性を認めているか。(単語の暗記を強調すべきではない。)
- (o) 4技能を別々に扱っているか。お互いが混ざり合っていないか。
- (p) 内容と外観のバランスがよくとれているか。外観のために内容が犠牲になっていないか。
- (q) フォーマットに現実性がある、その種類も多いか。

- (r) 4技能の学習の順序についての説明があるか。話す技能と聴く技能が優先されているか。
- (s) 文法などの導入の順序の根拠が明確に示されているか。

*Framework*にはさらに会話、聴解、視聴覚教材、読み教材、書技能についてこうあるべしという記述がありますが、今はそこまで立ち入る時間がありません。しかし、今あげました(a)から(s)に *Framework* の基本的な主張は十分に出ていると思います。アメリカでの日本語教育は大きく言って、構造言語学的か、ポスト構造言語学的かの軸と、コミュニカティブのか、コミュニカティブ、プロフィシエンシー的か、の軸で分類されると思われますが、このチェックリストを見てみると、非常にアプローチが接近、収斂してきています。時代の趨勢を表わしていて興味深いことだと思いますが、そのために、シラバス感覚がやや不統一、不鮮明だとも言えるでしょう。例えば、(f)、(n)、(s)はかなり構造、文法シラバスのですが、(i)は自然な場面を狙っていて、場面シラバスのです。私は *Framework* の基本路線には大賛成ですが、不賛成の部分もあります。まず、タスクシラバスというよりも文法シラバスの性格が強い点です。それから、(m)のように、ローマ字表記法を暗に擁護している点です。(ローマ字擁護は例えば、甲田慶子 (The effects of Lower-Level Processing Skills on FL Reading Performance: Implications for Instruction, The Modern Language Journal 76, 502-512, 1992) の表記法の第2言語習得理論にもとづく研究を見ると、それが理論的根拠がないことが分かります。) もう一つは、アメリカ人が日本語を話す相手は日本人であるべし、といている(h)です。たしかに、アメリカ人がアメリカ人と日本語を使うというのはいかにも不自然ですが、私はアメリカ人が日本語を使う相手は必ずしも日本人ではないと考えた方が現実的だと思います。現に日本には、英語が分からないけれど、日本語を「共通語」として使っている外国人が大勢いるはずで、そのような現実を盛り込んだ教科書、教材があるべきだと私は主張したいのです。(h)の背後には日本人以外の外国人は英語が分かるはずだという考えがひそんでいますし、こういう考えが教科書で強化されていくと、日本語が日本人離れて、「共通語」になるのは大変難しくなるのではないのでしょうか。21世紀に向かって、従来の日本語＝日本文化＝日本人といういかにもウチ的な図式を再構築する必要があるのではないのでしょうか。

上級の学習者のニーズに対応する教材はどうあるべきでしょうか。実は上級用の *Framework* 作成委員会は去年の9月に発足したばかりで、*Framework* の *Framework* を検討中です。まず何を上級日本語とするのかという、上級日本語の定義に関する討議が必要なのです。実はそう言い出すと、*Framework* を熟読しても、初級日本語の定義らしいものはなくて、なんとなく既出の1年生用の教科書を初級日本語だと決めてしまっている感じです。その辺を私は全米外国語協会 (American Council on the Teaching of Foreign Languages) と教育テスト開発協会 (Educational Testing Service) が採用している外国語熟達度の基準か、それに準ずるようなものに照らして定義しなければならないと思っています。今仮に、ACTFL/ETSの基準でいうAdvanced以上を上級とすれば、そこに自ら、教材開発の出発点が決まるわけで、このような基準なしには、教材開発に体系的な熟達度の座標軸が欠けることになり、場当たり的にならざるを得ないのではないかと思います。

Advanced以上(すなわち、Advanced, Advanced High, Superior)の基準からどんな教材像

が見えてくるかを技能別に表にまとめて見ました。立ち入って説明する時間がないので、表2をご参照ください。

表2 上級用教材

(A) ADVANCED:

- 話技能： a. こじれた状況を練習するロールプレイ、シミュレーションなど。  
b. 一人話の教材。段落を使って、説明、叙述、物語を練習する教材。  
c. (ゼロ接続詞を含む) 接続詞の使い方を練習する教材。  
d. 統括の談話文法を練習する教材。  
e. 言語的挫折回避練習の教材。すなわち、単語を忘れても、それを文で言い換えるストラテジーを強化するような教材。言い換え練習教材。言い直し練習教材。「あのう」、「このう」、「まあ」、「ええと」、などのフィラーを使って、挫折を避けるストラテジーを練習する教材。  
f. 待遇表現一般を身に付ける教材。
- 聴技能： a. 様々な話題の段落レベルの聴きとりを練習する教材。インタビュー、短くて、身近な内容の講演、ニュースなどの教材化。  
b. 大意取り(スキミング)や情報掴み(スキヤニング)だけでなく、細部の理解を練習するような教材。  
c. 待遇表現などから、話し手の年齢、話し手相互の社会的地位関係などを推測する教材。
- 読技能： a. 複段落の散文(手紙、通知、新聞のニュース、業務用書簡、参考文献の情報、物語、小説、論説)を読み取る練習をするような教材。  
b. 待遇表現などから、書き手の年齢、社会的地位関係などを推測する教材。  
c. 小説の視点を認知する教材。  
d. 複雑な文の修飾関係(特に、拡大文節)を認知する教材。  
e. ゼロ代名詞を含む省略および反復のレトリックを学ぶ教材。
- 書技能： a. 数段落の文章(手紙、メモ、要約など)を書く練習の教材。  
b. 句読点の使い方を練習する教材。  
c. 複雑な文の修飾関係(特に、拡大文節)を意識しながら書いていく練習の教材。  
d. ゼロ代名詞を含む省略および反復のレトリックを学ぶ教材。

(B) ADVANCED HIGH:

- 話技能： a. 具体的な話題を幅広く話せるようになる教材。  
b. 裏付けのある意見を言わせるディベート形式の練習教材。  
c. 詳細な、やや専門的な説明を必要とするようなロールプレイ、シミュレーション、ミニプロジェクトワークの教材。  
d. 仮説を立てて議論できるような練習教材。  
e. 語彙の使い分け、特に、一つの概念に対して和語、漢語、借用語の適時の使用を学ぶ教材。
- 聴技能： a. 複雑な複段落でかなり抽象的な内容/話題を聴く練習教材。  
b. 裏付けのある意見の部分をスキャンして聴く練習教材。  
c. 表面上の意味以外に文化的な意味を聴いて認知する教材。
- 読技能： a. 複雑な複段落でかなり抽象的な内容/話題を読む練習教材。  
b. 裏付けのある意見の部分をスキャンして読む練習教材。  
c. 表面上の意味以外に文化的な意味を読んで認知する教材。  
d. 日本語のジャンル別、代表作家別のスタイルの感覚を教えるような教材。
- 書技能： a. 自分の意見を支持するような複段落の文章を書く練習の教材。  
b. 自分の専門分野に関する話題の具体的な部分について書く練習の教材。  
c. 日本語的な文章の起承転結及びスタイルを学ぶ教材。

(C) SUPERIOR:

- 話技能： a. 実際の、社会的、専門的、抽象的な話題についての確かなスピーチレベルで話せるようになる教材。  
b. 自分の専門領域について細部にわたり話せるようになる練習教材。  
c. 待遇表現の基本をまちがいに話せるようになる教材。



- d. 徹底的に裏付けのある意見を表現する練習教材。
- e. シャレ、冗談、慣用句などが一通り出来るようになる教材。
- f. 談話管理のストラテジーを学ぶ教材。

聴技能：a. 大学の講義、大学院のゼミの講義、講演、演説、報告などの専門的、かつ抽象的な内容を聴く練習教材。

- b. シャレ、冗談、慣用句などが一通り聴けるようになる教材。
- c. 日本語の文化的枠組みの中で推論ができるようになる教材。
- d. 発話の社会的、文化的、情意的意味合いを聴きとる練習教材。
- e. 大阪方言のような主要方言を聴き取る練習教材。

読技能：a. 学術的、専門的な本を読む練習教材。

- b. 文学作品のように楽しみながら読む練習教材。
- c. 文章の背後にひそむ古典や諺からの引用、ほのめかしを読んで認知する教材。
- d. トップダウンとボトムアップの二つの読み方を柔軟に選ぶことが出来るようになる教材。

書技能：a. 待遇表現を心得て、自分の意見を支持するような複段落の文章を書く練習の教材。

- b. 自分の専門分野に関する論文、研究報告、業務上の報告文を書く練習の教材。
- c. 自分の論点や見解を正確かつ効果的に書くことを学ぶ教材。

これまでのところでは、技能別に、すなわち単技能的に、見てきましたが、実際の言語生活では言語を問わず、多技能的な言語使用が多いわけで、当然、多技能的な教材の準備が必要になってきます。例えば、小説を読んで、それを映画化したものを見て、その感想を人前で話して、それを文章に書いてまとめる、と言った場合、読技能、聴技能、話技能、書技能という4技能すべてを、一定の順序で、総合的に使って一つの言語活動（タスク）を行っているわけです。初級の日本語教育では、力点は話技能と聴技能におかれるべきですが、それでも、初級は初級なりの多技能的な教材が必要だと思われまます。この点で *Framework* の(0)を鵜呑みにしてはいけません。上級の日本語教育ではこの多技能的な教材開発は学習者の熟達度を上げるために必須だと考えられます。この詳しいことは割愛させていただき、最後に、必要な教材を作成するにはどうしたら良いか、について短くまとめたいと思います。まず学習者のニーズに合わせて教材を作らなければならないのは当然ですが、特に初級の場合は学習者全体のニーズが「話せればいい」というのでなければ、話技能と聴技能に焦点を合わせながらも、読技能と書技能を教える教材を、原則としては、*Framework* に従って作成すべきでしょう。上級以上 (ACTFL/ETS でいう Advanced High, Superior) になると、学習者のニーズがかなり煮詰まってくるので、「おはこ」づくりを助長しない程度に学習者のニーズを満足させるべきでしょう。外国語学習の場合ニーズに合わせ過ぎると「専門バカ」を育ててしまうので、教師の側は熟達度のタテ軸思考を忘れてはいけません。これはどういうことかと言いますと、プロフィシエンシーテストを施行することによって、学習者の現時点での総合能力が熟達度のタテ軸のどこに位置づけられているかを心得ておき、それと、ニーズ分析をうまく調和させることが肝心だと思われまます。以上、駆け足でアメリカにおける日本語教材を総覧し、簡単な分析を加えて見ました。

#### [Appendix]

- 1) Alfonso, A., Goto, S., & Hoas, S. *Japanese*, Curriculum; Development Centre, Australian National University, 1976
- \*\*2) Allen, C. with Watanabe, N. Nihon to no Deai, *A Homestay in Japan, Intermediate Reader for Students of Japanese*, Stone Bridge Press, 1992
- 3) Hibbett, H. & Itasaka, G. *Modern Japanese. A Basic Reader*, Harvard University Press, 1965

- 4) Higurashi, Y. *Current Japanese — intercultural communication*, Bonjinsha, 1987
- 5) Hori, U., Mitsui, T. & Matsumori, E. *Nyuusu de manabu Nihongo*, Bonjinsha, 1987
- 6) Hori, U., Mitsui, T. & Morimatsu, E. *Intabyuu de Manabu Nihongo*, Bonjinsha, 1991
- \*\*7) Inter-University Center for Japanese Studies, *Formal Expressions for Japanese Interaction*, The Japan Times, 1991
- #8) Inter-University Center for Japanese Studies, *Writing Letters in Japanese*, The Japan Times, 1992
- 9) Itasaka, G, Makino, S. & Yamashita, K. *Modern Japanese — an Advanced Reader*, Kodansha International, 1974
- #10) Japan Foundation, *Yan and the Japanese People*, I & II, 1984
- #11) Japan Foundation, *Nihongo Kyoiku Bideo Shirizu*, 1981-1982
- 12) Jordan, E. & Noda, M. *Japanese: The Written Language*, Yale University Press, 1993
- 13) Jordan E. with Noda, M. *Japanese: The Spoken Language*, Yale University Press, 1987-90
- 14) Kakutani, A. *Nihongo*, Earlham College, Indiana, 1990
- 15) McBride, H. *Kimono*, 1, 2, 3, EMC Publishing, 1990
- 16) Mizutani, O & Mizutani, N. *An Introduction to Modern Japanese*, The Japan Times, 1977
- \*17) Miura, A. & McGloin, N. *Integrated Approach to Intermediate Japanese*, The Japan Times, 1994
- #18) Motohashi, F., Hayashi, *24 Tasks for Basic Modern Japanese*, vol. 1 & 2, The Japan Times, 1989
- 19) Ohso, M. & Koyama, Y. *Japanese for You*, Taishukan, 1988
- 20) Sato, E., Shishido L., & Sakakihara, M. *Japanese Now*, University of Hawaii Press, 1982
- \*21) Takagishi, Y., Matsumoto, K. & Kawagoe, N. *Communication through Pictures*, Bonjinsha, 1991
- \*22) Tohsaku, Y. *An Invitation to Contemporary Japanese (Yokoso)*, McGraw-Hill, Inc., 1994
- \*23) Tsukuba Language Group, *Situational Functional Japanese*, Vols. 1-3, Bonjinsha, 1993
- \*\*24) Ujie, K. *Video-Cued Structural Drills*, Tokyo Shoseki, 1988
- \*25) Ujie, K. *Nihon o Yomu*, Bonjinsha, 1990
- 26) Young, J. & Nakajima-Okano, K. *Learn Japanese*, University of Hawaii Press, 1967-68, 1984-85

【文献 (表に未出のもの)】

- A Framework for Introductory Japanese Language Curricula in American High Schools and Colleges*, National Foreign Language Center, Washington D. C. 1993.
- Alice Omaggio Hadley *Teaching Language in Context*, Heinle & Heinle, (2nd ed.), 1993.
- Daub, E., Bird, R. & Inoue N., *Basic Technical Japanese*, University of Wisconsin Press, (1990)
- Daub, E., Bird, R. & Inoue N., *Comprehending Technical Japanese*, University of Wisconsin Press/ University of Tokyo Press (1975)
- Daub, E., Bird, R. & Inoue, N., *Basic Technical Japanese*, University of Wisconsin Press, (1990)
- Jorden, E. with Lambert, R. *Japanese Language Instruction in the United States: Resources, Practice, and Investment Strategy*, National Foreign Language Center Monograph Series, Washington D.C. 1991.
- Koda, Keiko "The Effects of Lower-Level Processing Skills on FL Reading Performance: Implications for Instruction", *The Modern Language Journal* 76, 502-512, 1992.
- Makino, S. "Current and Future Issues in Japanese Language Teaching in the U.S.", *Japanese Studies in the United States, Part I. History and Present Condition, Japanese Studies Series XVII*, Japan Foundation, 83-94. 1988. (The Japanese version: 「米国における日本研究——歴史と現状」 89-99, 1989.
- Makino, S. & Tsutsui, M. *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*, The Japan Times, 1986.